

眼がつぶれるほどの想像力を駆使した詩人

高炯烈『長詩 リトルボーイ』日本語版を出版して

なぜ、広島に原爆は投下されたのか。その広島ではどのようなことが引き起こされたのか。その問いに答えるために韓国の詩人である高炯烈（コヒョンヨル）さんは一九八七年から八年かけて七九〇〇行を超える詩行を書き上げ、十一年前の一九九五年に韓国ソウルで出版した。日本語版序文でこの試みは「誰も認めなかった」と高炯烈さんは書き記している。その陝川（ハプチョン）の韓国人被爆者の取材を基にした、無償で膨大なエネルギーを注いだ行為は、報われることはなかった。詩人・編集者として名の知られる高炯烈さんの経歴や紹介文の中には、この長詩のことは全く触れていないものもある。しかし逆に言えば故郷で黙殺され「誰も認めなかった」ことは、この長詩の時代の先駆性を物語っている。核兵器を産み出してしまった人類の悲劇を、核兵器そのものの誕生と投下までを「リトルボーイ」に語らせると同時に、日本人ではない一人の朝鮮人少年「リトルボーイ」の視線を通して、二重に原爆投下に至るまでの状況とその地獄の光景を描き出そうと試みたのだ。

私は一九九八年に詩友の本多寿さんから韓国の詩人で翻訳

ての根底になくてならないものだ」と痛感する。高炯烈さんは七九〇〇行の最終連を八行の短い「草の葉」という詩篇で終える。

草の葉

遠く海に草の葉一枚が流れている。

あの草の葉の上に私たちを皆載せることができるか。

善良なすべての命ある目は眺める。

どうして私たちはこの海におぼれてしまったのか。

葉脈が一つも壊れていない草の葉一枚だけ

あの水平線近くに切なく流れている。

あなたは私たちに近付こうとされないので。

険しい黒い雲が海を越えて吹いて来る。

私は発行者編註として次のように記した。「高炯烈氏の『長詩 リトルボーイ』は単純な反日・反米の作品ではない。こ

の書は日本・米国・韓国・北朝鮮等の民衆の一人一人が被爆者たちの前で和解するための原点となりうる書であると私は考えている。二十世紀のナシヨナリズムを超えた二十一世紀の進むべき哲学を内包させた長編詩だ」。この書は現在のアジアの危機を超えていく根源からの眼差しがある。莊子や仏教のアジア思想やカントなどのヨーロッパ哲学を自らの血肉と

家の韓成禮（ハンソンレ）さんを紹介された。その際に韓国の現役詩人たちのことを教えてもらった。その詩人たちの中に『長詩 リトルボーイ』を書いた高炯烈さんがいた。その内容を聞いて驚いた。韓成禮さんは私がこの詩人に関心を持ったので、知る限りのことを教えてくれた。この長詩は、日本の原爆詩を超える、グローバルな視点を持っているのではないか。そんな直観を抱いたのだった。いつかこの詩人についてみたいし、この詩集を日本語に訳して読んでみたい。そういう思いが募っていると、一年後の一九九九年に高炯烈さんが初めて日本に来日することになり、会うことができた。私は、高炯烈さんを質問責めにして、周りの詩人たちから注意をされるほど独占してしまった。私が一九八七年から発行している詩誌「COAL SACK」（石炭袋）に翻訳し、数年後に出版しようという提案をした。高炯烈さんはすべて鈴木さんにお任せしますと言ってくれた。それから私は韓成禮さんに翻訳をお願いして、七年がかりで翻訳を終えて、今年の二〇〇六年八月六日に日本語版が出版された。前日の五日には高炯烈さんを招待し、広島で出版記念・交流会を開いて、多くの支援してくれた日本の詩人たちが全国から集まりその偉業を讃えたのだった。この七年間には、韓流ブームが起こり、独島の問題や北朝鮮の核兵器製造など様々な問題が吹き出てきたが、私たち日本の詩人と高炯烈さんと韓成禮さんの友情は、国境を超えて強くなった。私はこの友情こそがすべ

し、私たちの原点である「草の葉」に立ち返ってこれからの時代を作り直していく希望が存在している。詩を読むことはない人でも、歴史の根源を問い、平和を願う人なら必読の書だろう。高炯烈さんの孤独な試みはいまや不幸な歴史の痛みを超えて、「日本・米国・韓国・北朝鮮」の共有財産にきつとなるだろうと私は確信している。